

秋霧のましろき中に藤はかま一むらさける静かなる朝
五ひらの花の形は星に似てみ空の色に咲ける桔梗
ことぶきのためしにひかるきくならうつろひゆきぬ一日二日に
コスモスの花つみどりてくちにあてわか思ふことさゝやきて見る
萩見ても尾花を見てもかなしかりわがわかき日のゆかんとすれば
まちを行く人のさゝめきしつまりて短き夏の夜はふけぬらし
潔よきいけにえなりとほゝゑめる友のひとみに涙見えけり
木々の葉のうすもみぢせるうれしさに早くもきつる山のいたゞき

以下四首 栗

州

山かげの櫓の小林あきされば隙多くなり遠き瀧見ゆ
紅葉ちる二荒の山の夕くれに心しみく秋をおぼゆる
小春日のくれ行く海の遠ち方に灰色の帆の見ゆるほのかさ
波もなき秋の夕の入海にひやく櫓の音きくはわひしも

身の儘に

千葉安良

身の儘に振舞はざるをたふとくも思へど時に物ぞ足らはぬ
淋しさこそその悲しさを秘めもちて笑ひてあれば心やすかり
いと高きかの悦びといと深きこの悲しみと胸にあふるゝ
かの歡喜この哀愁ぞ我が生くる方のもとよあはれはかなき
はかなしと思ひ果つべくあまりにも尊く人の世の見ゆれども
いと輕うをかしき方にも物を見なし振舞ひすぐすよろしさ
教養のゆたけきさまの人々にむかひてありし淡きよろこび